薄田泣菫

完本茶話

中

谷沢永一
浦西和彦 編

冨山房百科文庫

38

完本 茶話

中

薄田泣菫

谷沢永一
浦西和彦 編

冨山房百科文庫
38

完本 茶話 中
— 冨山房百科文庫 38 —

一九八三年十一月二十五日 第一刷発行
一九八四年十月二十日 第六刷発行
定価 七八〇円

著者 薄田泣菫
編者 谷沢永一 浦西和彦
発行者 坂本起一
印刷者 山田隆
株式会社 精興社
加藤製本

発行所 合資会社 冨山房
〒一〇一 千代田区神田神保町一丁目三番地
電話 (〇三)二九一—二一七一
振替 東京五—五四五二九

© Printed in Japan 1983.
(落丁・乱丁本はおとりかえいたします)
ISBN 4-572-00138-3

目次

大正六年（承前）　329
大正七年　471

大正六（一九一七）年　承前

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

時計盗み

8・2（夕）

「安全第一」といふ事はよく亜米利加雑誌の広告に使はれてゐる文句だが、その発明は米国よりも日本の方がずつと早い。そしてそれを発明したのは小心者の癖に懶惰者である「教育者」といふ階級である。

市の天王寺中学で、ある実業家の子供が時計を盗まれた事があつた。時計は親譲りのかなり古い物で、疲れ切つた針は一昼夜を廻るのに二十四時間と三十分程かかつたが、それでも螺旋を巻くのさへ忘れなかつたら、時計は教育家のやうに悲しさうな溜息を吐き〳〵動いてゐた。

その時計が学校で盗まれたのを聞くと、校長は自分の同僚が首を縊りでもしたやうに悲しさうな顔をした。そして、あんな忠実な古時計を、持主のポケットから盗み出した奴は、見つけ次第狗殺しのやうに叩きのめしも仕兼ねない意気込で廊下を歩き廻つてゐたが、暫くすると急に立ち停つて、何か教育上の大発見でもしたやうな晴々しい顔をした。

校長は盗まれた生徒を呼び出した。そして時計を盗まれたのは全く気の毒だ、これからは成るべく盗まれないやうにしなければならない、それには良い方法がある、と言つて、十二時を打つた時計のやうに両脚を机の下で揃へて卓子に頬杖をついた。

「方法つて、何う致すのです。」

生徒は校長の顔を覗き込んだ。

「何うもしない、時計を持たないのさ。つまり時計なぞ持つから盗まれるやうな事になるんぢやないか。」と校長は失くなつた古時計の代りに、こんな立派な教訓を授けるのは、差引勘定には合はないが、その勘定に合はないところに教育者の職分があるとでもいつたやうな高尚な顔つきをした。

「時計さへ持たなかつたら、盗まれる心配はないのだ。」——流石は教育者で、言ふ事がちやんと理に合

つてゐる。そしても一つ合理的に言つたら、時計は持つてゐても、学校へ来さへしなかつたら、盗まれる心配は無い事になる。

時計と生徒にとつて、学校は実際危険な所さ。

帽と勲章

8・3(夕)

物を記憶えるといふ事が技術なら、物を忘れるといふ事も一種の技術である。人間といふものは、打捨つておくと、入用のない、下らない事を多く記憶えたがつて、その代りまた大切な物事を忘れたがるものなのだ。

先日の特別議会が済むと、田舎出の議員の多くは汽車に乗込んでぞろぞろ国元へ帰つて往つた。そのなかに山口県選出の三隅哲雄氏も交つてゐた。

夏分の旅は何よりも身軽で無くてはならぬ。で、三隅氏は旅鞄はそつくり手荷物として預け入れたが、そのうち唯二つの小荷物だけは、自分の坐席へ持ち込んで、網棚の上へ置くのを忘れなかつた。

三隅氏は憲政会の所属代議士であると共に、郷里では田地持だといふので郡農会の会長をも勤めてゐる。この年若な代議士は、窓枠に頭を凭せて、内閣不信任案当時の議会を思ひ浮べてみた。

演壇の上には尾崎行雄氏が衝立つて、物に怯えた魚のやうな表情をしてゐる。議場は蜂の巣を突ついたやうな騒ぎだ。大臣席には寺内(正毅)伯の尖つた頭がてか〳〵光つてゐる。

「まるで馬鈴薯のやうな顔だ——馬鈴薯といへば、もう徐々植ゑつけなくつちやなるまいて。」

と、三隅氏は直ぐその頭で、馬鈴薯の値段なぞ考へたが、急に思ひ出したやうに、頭の上の網棚を見た。そこには小荷物が二つちやんと載つかつてゐた。三隅氏は安心したやうに煙草に火をつけた。

汽車が下関駅についた時には、三隅氏はぐつすり寝込んでゐた。僅に呼び起されて慌てて駈け出して往つ

たが、余り慌てたので、棚の上の小荷物は二つともすつかり忘れてしまつてゐた。

翌る日になつて三隅氏は真青な顔をして下関駅の遺失物掛を訪ねて来た。そして夥しい忘れ物のなかから、自分のを捜し出して、大喜びで中を検めて見た。――なかには買ひ立ての絹帽と勲四等の勲章が悲しさうな顔をして転がつてゐた。

食べ方

8・4(夕)

藤田東湖は貧乏だつたから、酒の好いのが何よりも好物であつた。(内証で言つておくが、すべて富豪といふものは貧乏人とは反対に酒のよくないのを好くものなのだ。)で、その良い酒を飲みたいばかりに、頼まれると蕎麦屋の看板だの石塔だのを平気で書いた。書の相場は酒を標準に一本一升といふ事に極めてゐた。

東湖は酒徳利を座敷の本箱の中へこつそり忍ばせておいて、箱の蓋には生真面目に李白集と書いてゐた。実際李白集があつたら質に入れて酒に替へ兼ねない程の男だつたのだ。

酒の肴にはやつこ豆腐か松魚の刺身かがあつたら、猫のやうにころころ咽喉を鳴らす事が出来た。水戸には今だに東湖の模倣者も少くない事だから、さういふ人達にとつて、東湖が俺は鱗が好きだと言はないで、やつこ豆腐で辛抱したのは、どれだけ幸福だつたかも知れない。これにつけても追随者を成るべくどつさり有ちたいものは、食物も精々手軽なところを選ばねばならない事になる。

実をいふと、東湖はやつこ豆腐よりもまだ鰹の刺身の方が好きだつた。好きだけに、それを食べるのに自分独得の方法を発明してゐた。それは一つ一つ箸で撮み上げる代りに皿を掌面に載つけて、猫のやうに舌の先でぺろぺろ嘗め込むでしまふといふ芸当である。

京大法科の佐々木惣一博士は、蜜柑を食べるのに、人と異つた食べ方をする。それは指先で皮を剝かない

で、蜜柑を掌面に載せておいて、前歯でそれに嚙りつく、そして出来た歯形に指を突込むでそれから徐々剝いて行くといふ遣り方である。

それと同じ事を尾長猿が行つたところで、嬰児が行つたところで少しも気に懸けるには及ばない。要するに蜜柑は中味を食べさへすれば可いのである。

生食

8・5(夕)

トルストイが菜食論者だつたのは名高い話だ。尤もトルストイ嫌ひな男に言はせると、いつも夜になると、こつそり台所へ這ひ出して来て、肉皿を啄つついたといふが、そんな事は神様にでも訊かない限り、嘘か、真実か判らない。

女優のサラ・ベルナアル、平和論者のラ・フオレツト、彫塑家のロダン、著作家のバアナアド・ショオ、それから今一人支那の伍廷芳——といつたやうな人達は、揃ひも揃つて皆菜食主義者である。菜食主義者だといへば、文字通りに肉を食べないで、穀物や野菜ばかしでお腹を拵へてゐる人達の事である。

菜食主義者の説によると、かうした人達が偉くなつたのは、平素血の垂るやうな獣の肉を嚙らないで、清浄な菜食をするからださうだが、それに反対する肉食論者はまた、

「そんな筈があるものぢやない、物は試しだ、一月でいゝからサラ・ベルナアルに柔かい雛鶏を、ショオに羊の肉でも食べさせてみるがいゝ、二人ともつと気の利いた事を行るやうになる。」

と言つて、蔑になつてゐる。

先日亡くなつた米国の小説家ジャツク・ロンドンは、肉食論者にもう一歩を進めて、凡ての魚類を生のまゝで食べようとした男だ。

「牡蠣や蛤を生で食ふ事があるのを思ふと、どんな魚だつて生きたのが食べられないつて法は無い。」

と言つて、平気でかますや烏賊を生の儘で頬張つてゐ

た。

二十万円

8・6（夕）

岡山県選出の国民党代議士池田寅次郎氏は、二十万円の資産を有つてゐる。――といふと、あの池田めがと頭からてんで相手にしない人があるかも知れないが、事実二十万円といふのは、池田氏自身の算盤から割出した勘定だから、間違つこのある筈がない。ところが、よくしたもので大抵の人はそれを信じない。

尤も偶にはそれを真実だと思ひ込む者が無いでもない。それは貧乏人といふ階級で、貧乏もどん底まで落ちると、相手の懐加減を見通す位は何でもなくなるが、中途半端の貧乏人になると、自分の前に立つ誰でもが富豪のやうに見えるものなのだ。かういふ半端者の貧乏人が国民党には少くない。

さういふ人達は池田氏の景気のいゝ懐加減を聞くと、朋輩の誼で幾らか立て替へて貰へるものと思つて、つい口をきり出してみる。すると、池田氏は物を呉れる者に附物の鷹揚な態度で、ポケツトに手を突込んだと思ふと、何か知ら摑み出して黙つて相手の掌面に載せて呉れる。――見ると、使ひ古しの郵便切手である。

池田氏は名代の切手蒐集家である。今の英国皇帝は世界切つての切手道楽で聞えた人だが、池田氏の集め方は、英国皇帝のとはずつと毛色が異つてゐる。ジョオジ五世のは、国々の珍しい切手ばかしを選り好みをするのだが、池田氏のはそんな事には頓着なく、どんな有り触れた物でも構はない、手当り次第に集めるので、かうして掻き集めたのが、今では積り積つてざつと二十万枚ある。

尤も中には何処へ出しても引けを取らない珍らしいのも交つてゐるが、一番多いのは今普通にある五厘、一銭五厘、三銭……といつたやうな切手で、池田氏はその値段を勘定するのに、成るべく他に判り易いやうに、そしてそれよりもまた成るべく自分に判り易いや

うに、一枚一円といふ値をつけてゐる。一円の切手がざつと二十万枚、疑もなく池田氏の財産は二十万円程ある事になる。

栗鼠は胡桃を勘定するのに、自分一流の数へ方を知つてゐる。池田氏がそんな方法を知つてゐたところで少しの差支もない。

孔雀女

8・8（夕）

女流声楽家三浦環と今は故人の千葉秀浦との関係は一頻り喧しい取沙汰になつたので、世間には今だにそれを覚えてゐる人も鮮くあるまい。

その千葉秀浦が維也納の旅籠屋で病死した時、環女史は多くの日本留学生に取纏かれて、倫敦で孔雀のやうな気取つた暮しをしてゐた。

千葉が亡くなつた事は、留学生の仲間には旋風のやうに伝はつて往つたが、肝腎の孔雀女にだけは誰一人知らさうとする者が無かつた。

「千葉め、とうと亡くなつたつてな。」

「さうだつてね。ところで内の孔雀だね、那女に知らせたものか知ら。」

「どうせ知らさなきやなるまいが、まあ僕は止さう、お冠でも曲げられると事だからね。」

といつたやうに、皆は孔雀のべそを掻くのを見るのが怖さに、誰一人千葉の事を言ひ出さうとしなかつた。

ある晩の事、いつもの日本人だけの夕飯会で、誰かが大学の講義を聴き過ぎて胃を悪くした事を話した。（実際大学の講義は頭ばかしではない、胃の腑をも悪くするものなのだ。）すると、それを聞いた環女史はしんみりした調子で、

「旅にゐて病気する程心細いものはありませんね。」

と言つた。何でもないその語が皆の耳には宛で音楽のやうに聞えたので、居合はせた人達は惚々した眼つきで女の口元を見た。

その折環女史と差向ひに、腰かけてゐたのは、京大

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

の助教授浜田青陵氏だつた。この年若な考古学者は環女史の言葉を引取るやうにして、

「でも世間には旅で死ぬる人さへあるぢやありませんか、現に二三日前も維也納で……」

「維也納で何かあつたんですか。」

環女史が身を乗り出すやうにして訊くのを見て取つた考古学者は、「少し言ひ過ぎたな」とは思つたが、さて何うする訳にも往かなかつた。

「維也納で客死した日本人があります、名前は確か千葉とか言ひましたつけ。」

「えゝ千葉ですつて……」

環女史は一口言つたまゝ菜つ葉のやうな顔色をして席を立つた。浜田氏は殉難者のやうな眼つきでその後姿を見送りながら、そゝつかしい自分の口許を捻つた。

――その口は考古学の外は何一つ喋舌つてはならない筈の口だつたのだ。

倹約人

8・9(夕)

備前の新太郎少将〔池田光政〕が、ある時お微行で岡山の町を通つた事があつた。普魯西のフレデリツク大王〔フリードリヒ二世〕は忍び歩きの時でも、いつも握り太の杖を揮り廻して途々懶け者を見ると、

「こら働きをらんか。」

と怒鳴りつけて、厭といふ程尻つ辺を杖でどやしつけたものださうだが、新太郎少将はそんな杖を持たなかつたから城下の人達は尻つ辺を叩かれる心配だけは無かつた。

新太郎少将はある家来の屋敷前を通りかゝつた。その折屋敷の主人は二三人の下男を相手に、頬冠りに尻を端折つて屋根を這ひ廻つてゐた。岡山人の頭に要らぬ智慧が一つ巣をくつてゐるやうに、岡山の家といふ家には、瓦の葺き合せに名も判らぬ草が生えてゐる。それを取り除けようとして、主人は埃だらけになつて

働いてゐたのだ。
主人は殿様のお通りだと聞いて、その仕事着のまんま、屋根から滑り下りて門外に蹲踞つた。少将はじろりと流し目に埃だらけの頭を見た。そして、
「屋根の繕ひ、大儀ぢやの。」
と言つて、有合せの小柄を褒美に取らせられた。主人は殿様のお賞めに預かつたのだからといつて、その日は一日屋根を這ひ廻つて、日の暮方まで下りて来ようとしなかつた。
翌る朝殿様から態々お召しがあつた。主人はそれを聞くと、
「ほう、また御褒美かな。そんな事になると、今度は隣家の屋根まで手を延ばさなくちやなるまいて。」
と、こんな事を思ひ思ひ登城した。
新太郎少将は気難しい顔をしてゐた。
「そちは昨日下男と一緒に屋根を繕つてゐたな。骨折は察しるが、身分不相応な働きぢやて……」
と言つて、かやうの事は下賤のすべき働きで、知行取は別にしなければならぬ仕事がある筈だ。あんな事が流行つては、家中の風儀が悪くなるからといふので、その男は長の暇を取らせられた。

狸と猿

8・10（夕）

山奥で猟をするものに聞くと、狸ほど安々と手捕に出来る獣は外に無いさうだ。追ひ詰めて獣が狼狽へるとき、
「おや、もう死んださうな。」
といふと、狸はいゝ気になつて、ころりと横に倒れた儘死んだ真似をする。その時手捕にすれば訳もなく出来るといふ事だ。
幾ら普通教育が行き渡つたからといつて、狸が人間の語を習つたといふ事も聞かないから、それが真実か何うかは請合ひかねるが、猟師はこの仕方で幾度か狸を手捕にしたと自慢をしてゐる。

この方法を人間に応用してゐるのは犬養木堂〔毅〕で、寺内首相の噂をする時には、いつも口癖のやうに、

「とにかく誠意だけはある。」

と云つてゐる。すると寺内首相もその気になつて、急に謹直らしい顔をして、鼻先から禿頭の天辺にかけて出来るだけ誠意ででかてかさせようとするが、巧く手捕に出来るか何うかは疑はしい。

また猟師に聞くと、猿を手捕にすると、よく皮を生剝にする。皮はその儘乾かして冬着にするのださうだが、真裸にされた猿は、自分の毛皮を見てはらはら涙を流すさうだ。

幾度も犬養氏を引合に出して気の毒だが、氏もこの頃では引つ剝された自分の毛皮を見て涙を流してゐるに相違ない。——だが、安心するがいい、剝がれた毛皮は誰も着ようとはすまいから。

訥子の発明

8・12（夕）

先日から重病で悩んでゐる土居通夫氏が、平素滋養として牛肉の肉汁を飲みつけてゐるのは名高い話だ。

牛肉の肉汁が滋養になるのはよく判つてゐるが、少し値段が張り過ぎるからといつて、格安な代用品を発明した男がある。それは「猛優」といふ名前で知られてゐる役者の沢村訥子である。

訥子といへば「血達磨」や「丸橋忠弥」の立廻りで、牛のやうに吼えながら牛のやうに搭闘するので聞えた男だが、あれだけの激しい立廻りをするのは、何か特別の滋養を採らなければならない。そこで考へ出されたのが塩引鮭の肉汁である。

塩引鮭の肉汁といふのは、名前通りに塩鮭の切身をとろ火で煮出した汁である。手つ取り早く言ふと安官吏の油汁のやうに脂つ気の薄い、鹹つぱい水気沢山なものだが、訥子は、

「うまい、素敵にうまい。」
と舌鼓を打ちながら、幾杯も立続けにそれを煽飲りつける。
「そんなものを飲つて、後で咽喉が渇くだらう。」
と言ふものがあると、訥子は牛のやうに上唇を嘗めまはして、
「渇いたら水を飲むまでで。」
と変もなげに言つてゐる。そのむかし京役者の坂田藤十郎は江戸の水は不味くて飲めないといつて東下をする時には、京の水を四斗樽に幾つも詰め込んで持つて往つたといふが、同じ俳優ではあるが訥子の舌は藤十郎のやうに賢くない、何処の水であらうと平気で咽喉を鳴らしながら飲む事が出来る。
訥子は塩鮭の肉汁の外に今一つ年の寄らぬ法を知つてゐる。それは自分に子供があるといふ事を忘れるので、訥子には世間も知つてゐる通り、帝劇俳優の宗之助、長十郎といふ二人の息子があるが、彼は一度だつて自分を「阿父さん」と呼ばせた事が無い。いつも「兄さん〳〵」で、自分もすつかり「兄さん」気取りで、兄としての心持以上に一足も踏み出さうとしない。
最後に訥子は今一つ不老の霊薬を知つてゐる。それは幼い雛妓を招んで遊ぶ事で、枯れかけた松の周囲に、小松を植ゑると、枯松までが急に若返へるやうに、訥子はかうして妓の若さを自分の有にしてゐる。

強力道心

8・13(夕)

今道心中馬甚斎が先日京都の武徳殿で大暴れに暴れて、居合せた巡査八人を手古摺らせた事は、八日の本紙夕刊に詳しく出て居た通りだ。
中馬には片つ方の耳朶が無い。それはこの男が西の宮の南天棒(中原鄧州)和尚の許に居た頃、ひどい傷をして耳朶が拗れかゝつた事があつた。中馬は猿のやうに耳を押へて医者の家に走つた。
医者はその折手術室である婦人客を診察してゐたの

で、中馬は暫く待合室に待たされた。婦人は指先に一寸切り創をしてゐたのに過ぎなかつたが、医者が丁寧に心の臓まで診察しようとしたので大分時間が手間どつた。女の心の臓が案外健康だつたので、幾らか物足りない気持で、医者が待合室へ入つて来ると、そこには中馬が引き拗つた耳朶を火鉢の火で炙つてゐた。

医者は呆気に取られた。

「何うしたのです、それは。」

「耳朶に怪我をしたものだから、縫つて貰はうと思つて来たのだが、余り手間取るから寧そ食つてしまはうと思つて。」

中馬はかう言つて、じろりと医者の顔を尻目にかけて欠餅か何ぞのやうにこんがり焼け上つた自分の耳をむしや〳〵食べてしまつた。医者は自分の手術料まで鵜飲みにされたやうな顔をして、呆やり衝立つてゐた。

中馬が力まかせに時々乱暴をするので、南天棒和尚が海清寺から退散を命けた事があつた。火吹達磨のやうに真紅になつた和尚の顔を見て取つた中馬は、すぐすごと庫裏に入つて往つたが、暫くすると掌面に何か血だらけの物を載せて、ひよつくり方丈に出て来て黙つてお辞儀をした。

和尚は掌面を覗き込んだ。血だらけなのは中馬の小指であつた。

「それで詫びようといふのか。」

中馬はも一つ黙つてお辞儀をした。

「ならぬ。」

和尚はきつぱり言ひ切つた。指を一本切つたからといつて過失を許したなら、この後また九度までは許さねばならぬ事になる。中馬はまだ九本の指を残してゐたから。和尚はそれがうるさかつたのだ。

だが、中馬にしてみれば、不用の指が一本出来た事になる。小指は恋をする者にとつて大事な材料だが、恋をする者の財布は大抵空つぽなので、それを売りつける訳にも往かなかつた。で、中馬はいつぞやの耳のやうに食つてしまはうとしたが、傍から止める者があつたので、ある外科医の許でそれを継ぎ合はせる事に

したさうだ。

悪戯小僧

8・14(夕)

アーノルド・デイリーといへば、米国では一寸聞えた俳優だが、以前フロウマンといふ同じ俳優の小僧を勤めてゐた事があつた。

善い小僧をさがすのは、善い主人を捜すよりもずつと難かしい。善い主人に出会つた小僧は、無論仕合せには相違ないが、善い小僧に出会つた主人の仕合せとは比べものにならない。

アーノルド・デイリーは無論善い小僧に相違なかつた。何故といつて彼は時々主人を訪ねて来るお客に悪戯をする事を知つてゐたから。人間といふものは、応接間の一つも有つやうになると、小猫や狆を飼ふとか、掘出し物の骨董を並べるとかして兎角お客に戯らをしたがるものなのだ。狆や骨董が見つからない場合、その代りとして小僧を使つたところで少しの差支もない。

ある時——正しくいふと、六月の或日だつた——ルイズ・ヘールといふ女優が、フロウマンを訪ねて来た。玄関に出て来た悪戯小僧のデイリーは、女客の顔を見ると口を窄めて挨拶した。

「生憎檀那は居ませんよ。」

「さう」と女優は一寸困つたらしい顔をしたが「それぢや暫く待たせて貰ひませう、よくつて？」

「えゝ、お好きなやうに。」

小僧は相手を応接間に案内して次の室に引き下つた。そして読みさしの『ロビンソン漂流記』を膝の上に開けながら、こんな離れ島に住んでゐたら、うるさい女優のお客も来なからうなどと考へてゐた。

女優が待つてゐる間に応接間の置時計は三度ばかり当てつけがましく時を打つた。幾らか癪くれ気味になつた女優は、険しい眼つきをして次の室に顔を覗けた。

「小僧さん、あなた御主人がいつ頃お帰りになるか御存知なくつて。」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert